**齋藤　吉郎（さいとう・きちろう）**

**1、プロフィール**

詩人。大正９年、官立弘前高校生の頃から黒石の文芸誌「胎盤」、弘前のパストラル詩集、詩誌「鴉」、「弘前新聞」などに、優れた抒情詩を発表した。

＜生没＞

1902（明治35）年９月15日～1981（昭和56）年５月９日

＜代表作＞

抒情詩「蛾」、「しぐれ」、「断片」（文芸誌「胎盤」、通巻六号）。「古沼」、「断章」（同誌、通巻七号）。

＜青森県との関わり＞

弘前市出身。県立弘前中学校、官立弘前高校（一回生）で学ぶ。弘前市禅林街「宝積院」に眠る。

**２、作家解説**

明治35年９月15日、弘前市で父鶴一、母やゑの長男として出生。姉二人、弟妹が八人居た。従弟に、齋藤吉彦（後に、慶応義塾大学文学部助手、同大予科講師、フランス文学者、民俗学者。）が居り、幼少の頃から大変仲が良かった。

大正９年、県立弘前中学校を卒業。翌年、官立弘前高等学校理科（第一回生）に入学した。この年の春から、詩人一戸謙三と文学的親交が始まり、直に、黒石の文芸誌「胎盤」に、詩「蛾」、「しぐれ」、「断片」を発表（通巻六号）。次号には、詩「古沼」、「断章」を発表した。同年、弘前のパストラル詩社主催の文化活動にも取り組んだ。（「マンドリン、ヴィオリン、ツベホーン獨奏会」、長安倶楽部）同12年、同詩社第八詩集に、詩「小指」、「小さな詩集に」を、第十詩集（四月号）には、詩「夢」、「瞳」を発表した他、表紙画も担当した。同年に開店した「かくはデパート」（弘前市一番町角）で開催された「西班牙（スペイン）社展覧会」に、油絵（「坂の上の聖教会」）を出品した。同年、「弘前新聞」に発表した詩「猫遊園」の書き出しの部分である。「 ─ 幸福な人々の涙のみが月夜に青い貝のやうな花々を開かしめる ─　月夜である／人々よ蒼白いページを開かう／植込は広い白砂の庭園に／月光を吸ひこんで／転がつてゐる海綿の群れ／まん中のこんもりとした繁みの下に／親猫の瞳が蛍光を放つてゐる／彼女は疲れはてた天文学者である」。「フランスの詩人ポール・ヴエルレーヌを思わせる詩であり、当時の詩壇に、そのような詩は全く存在しなかった。」と一戸謙三が評している。同14年に、官立千葉医科大学に進学し、弘前を離れることになったが、詩誌「鴉」（昭和２年）に、詩「乱視の嘆き」、「植物の涙」を発表した。

昭和４年、同大を卒業し陸軍軍医となる。この頃から詩作に遠ざかる。旭川、高崎での勤務を経て、同13年に関東軍軍医となり、渡満。旧満州国半截河（ハンサイカ）、密山陸軍病院長等を歴任、同21年に帰国。岩手県和賀郡東和町（妻の実家）に、齋藤医院を開業。戦後、地域医療の発展に尽力した。同56年５月９日、心筋梗塞により死去。

**３、資料紹介**

〇文芸誌「胎盤」（通巻七号） ※詩「古沼」掲載

雑誌

1922（大正11）年１月15日

220mm×150 mm

詩「古沼」は、官立弘前高校生の頃、藤原譲の筆名で文芸誌「胎盤」（通巻七号、大正11年１月15日）に発表した作品である。この号には、詩「断章」の一篇も発表した。この他、通巻六号、大正10年12月10日には、詩「しぐれ」、「断片」の二篇を発表した。